

## はじめに

人工知能（A I）の進化で、「今後20年程度で半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」（オックスフォード大のマイケル・オズボーン准教授）との予測さえある時代をむかえようとしています。そのような予測不可能な時代を生きる子どもたち一人一人が自らの可能性を最大限に発揮するためには、「知識の暗記・再生」を基本とした従来型の学力から、社会の変化に対応できる思考力や判断力を重視した学力に質的転換を図る必要があります。

平成29年3月に告示された小学校及び中学校の新学習指導要領において、知識習得が中心の受け身の学習ではなく、討論や発表などを通じた「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）による授業改善を打ち出したのも「変化への対応」と言えます。そこでは、「主体的・対話的で深い学び」を実践するために、情報をやりとりする「言語能力」と情報を収集・整理・比較・表現・伝達する「情報活用能力」は、「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられました。「情報活用能力」を育むにはICT環境の整備が不可欠であり、新学習指導要領の総則にも、必要な環境を整えることが明記されています。さらに、新学習指導要領では、各教科において随所にICT活用が例示されています。教科指導におけるICT活用とは、教科の学習目標を達成するために教師や児童生徒がICTを活用することです。これらは、1) 学習指導の準備と評価のための教師によるICT活用、2) 授業での教師によるICT活用、3) 児童生徒によるICT活用の三つに分けられています。小学校でプログラミング教育が新しく必修となる等、教師のICT活用能力の向上は今後ますます重要な課題となってきます。

そのような中で、愛教研情報教育委員会では、「情報社会に主体的に生きる力を育む教育の研究と実践」の研究主題のもと、新しいICT機器としてタブレットに焦点をあて活用研究に取り組んでまいりました。特に7月に開催しました愛媛県情報教育研修会においては、ICT機器を活用した4本の実践事例の発表を行いました。また、『「教師にとっての『ICTで何ができるようになるか』』について考える』という演題で、徳島県東みよし町立足代小学校の中川斉史先生にご講演をいただき、ICT活用に関する示唆に富んだアドバイスをいただきました。さらに、午後からはタブレットを活用した授業づくりのワークショップやタブレットを实际に使用して「NHK for School」による楽しい授業づくりの講座も開催しました。また、本研究紀要には、支部ごとの取組についてもまとめられています。今後もこういった県内外の先進的な取組と連携を図りながら、実践的な研究を継続していく所存です。

なお、平成7年に誕生した愛教研情報教育委員会ですが、来年度より視聴覚教育委員会と統合し、新たに「視聴覚・情報教育委員会」としてスタートします。これまで両委員会で培ってきた研究成果や取組を合わせてさらに充実した研究を進め、先生方へ最新の情報や充実した研修機会の提供ができるものと期待しています。

最後になりましたが、本研究紀要に貴重な実践を提供して下さった先生方や情報教育委員会の取組に対して様々なご支援ご協力をいただいた皆様に心より感謝を申し上げます。